TV 報道検証【報道特集】　報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日： 2018 年 10 月 27 日

出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子

検証テーマ： アメリカの不審郵送物、オープニング、伊方原発再稼働
朝鮮通信使の木造船再現、天皇皇后両陛下が高知県の林業大学校を視察
【特集】安田純平さん解放を検証
【特集】不条理に立ち向かう元 BC 級戦犯

報道トピック一覧

・アメリカの不審郵送物
・伊方原発再稼働
・宮城県大崎市の病院で孫が入院中の祖父を刺殺
・テスラが不可能な生産計画を公表し投資家を欺いた疑いで FBI が捜査
・朝鮮通信使の木造船再現
・鹿児島ホワイトタイガーの展示再開
・叡山電鉄が全線運転再開
・新潟県長岡市で重機のせたトレーラーが歩道橋に衝突
・天皇皇后両陛下が高知県の林業大学校を視察
・群馬県伊勢崎市で中国人技能実習生の女性が死亡、殺人事件の可能性
・横浜市の倉庫で盗んだウィスキーを転売した派遣社員を逮捕
・ボージョレ・ヌーボーの初荷が羽田空港に到着
・【特集】3 年 4 ヶ月ぶり安田さん解放
・【特集】
・スポーツ報道

放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨

・アメリカの不審郵送物：結論→特に問題なし

26 日にはニューヨーク市内の郵便局でオバマ前政権の高官に当てた不審な郵便物が発見されるなど 22 日以降、全米で見つかった爆発物入りの郵便物は 14 個に上っていて、送付先はオバマ前大統領やヒラリー・クリントン元国務長官など民主党の大物の他、俳優のロバート・デ・ニーロさんや CNN テレビのニューヨーク支局などトランプ大統領に批判的な人物やメディアあてであったこと、この事件で捜査当局はフロリダ州に住むシーザー・セヨク容疑者を逮捕したことが伝えられた。また、セヨク容疑者の車にはトランプ氏支持を表明し民主党関係者を攻撃する内容のステッカーが貼られていた他トランプ氏の集会で CNN を批判するプラカードを掲げるセヨク容疑者の姿も確認されていることが伝えられた他、記者からの「車に大統領の顔写真が貼ってあったのを見たか？」という質問に対してトランプ大統領が「見ていないし知らないが容疑者は他の人より私を好んでいた人物だと聞いた。ただ見ていない。」と答えたこと、演説などで民主党を激しく攻撃する発言についてトーンダウンすべきと思うか、と聞かれると、「私はトーンダウンさせてきていると思う。私がトーンをあげたのはメディアが私や共和党に対して非常に不公平だったからだ」と述べたことが伝えられた。

この問題について当てられた時間は 132 秒で、放送法上は特に問題は見られなかった。

・オープニング：結論→特に問題なし

オープニングで金平キャスターが「3 年 4 ヶ月モノ長期に渡ってシリアに拘束されていた安田純平さんが帰国しました。安田さんおかえりなさい。安田さんの強靭な精神力には敬服するばかりです。この期に及んで自己責任論を掲げてバッシングする一部の人々には呆れて言葉を失います。」とコメントしていた。このコメントは 21 秒間のものであり、放送法上からは特に問題は見られなかった。

・伊方原発再稼働：結論→特に問題なし

裁判所の仮処分を受けて停止していた愛媛県の伊方原発参号機が今日未明およそ 1 年ぶりに再稼働したこと、抗議活動が行われるなか 30 日に送電が再開される予定であることが報じられた。また、今進められている作業は核分裂反応が連続する臨界に向けてのものであること、伊方三号機は定期検査中だった去年 12 月、広島高裁が阿蘇山の阿蘇山の巨大噴火のリスクを理由に先月末の期限付きで運転差し止めの仮処分を出したため停止が続いていましたものの先月 25 日に別の裁判長が仮処分を取り消し運転が認められたという経緯が伝えられた。住民の声として「原発を仕事にしているので再稼働してよかったなと思います、ただ被害とかそういうのが怖いので、そういうところは心配はしています。」と「想定外っていうことがあると一番困りますのでそういうことがないように。」が伝えられた。このトピックに当てられた時間は 91 秒で放送法上問題は特に見られなかった。

・朝鮮通信使の木造船再現：結論→特に問題なし

島根県の竹島の領有権を主張するソウルの集会の様子が取り上げられ慰安婦問題も含め日韓の間には多くの問題がくすぶり続けているとのことが伝えられた一方で、そうした中で江戸時代に朝鮮半島から日本に派遣された朝鮮通信使に関する資料がユネスコの世界記憶遺産に登録されて一年になるのを前に当時の木造船が再現されたとのことが報じられ、船の再現を担当した韓国国立海洋文化財研究所の洪淳在さんの「朝鮮通信使の船が平和の象徴としてずっと長く活用できたらいいと思います。」という発言が紹介されるとともに、平和の象徴として語られる理由として「朝鮮通信使が始まったのは豊臣秀吉による朝鮮出兵の直後、日本と朝鮮の関係は最悪でした。この時、対馬藩が両国の間を取り持ち 200 年間の友好関係が続きました。」とナレーションで説明が加えられていた。

登録に携わった専門家のユネスコ記憶遺産日本学術委員会の中尾宏委員長は「いちばん大切なことは、小異を捨てて大同につくという言葉がある、小さなことはさておいて大きなことについて意見の一致を見よう、そういうことをしなければ本当の講和なんて出来っこないです。」と朝鮮通信使に日韓関係改善のヒントがあると語った場面も取り上げられていた。

このトピックに当てられた時間は 179 秒で、放送法上は特に問題はなかった。

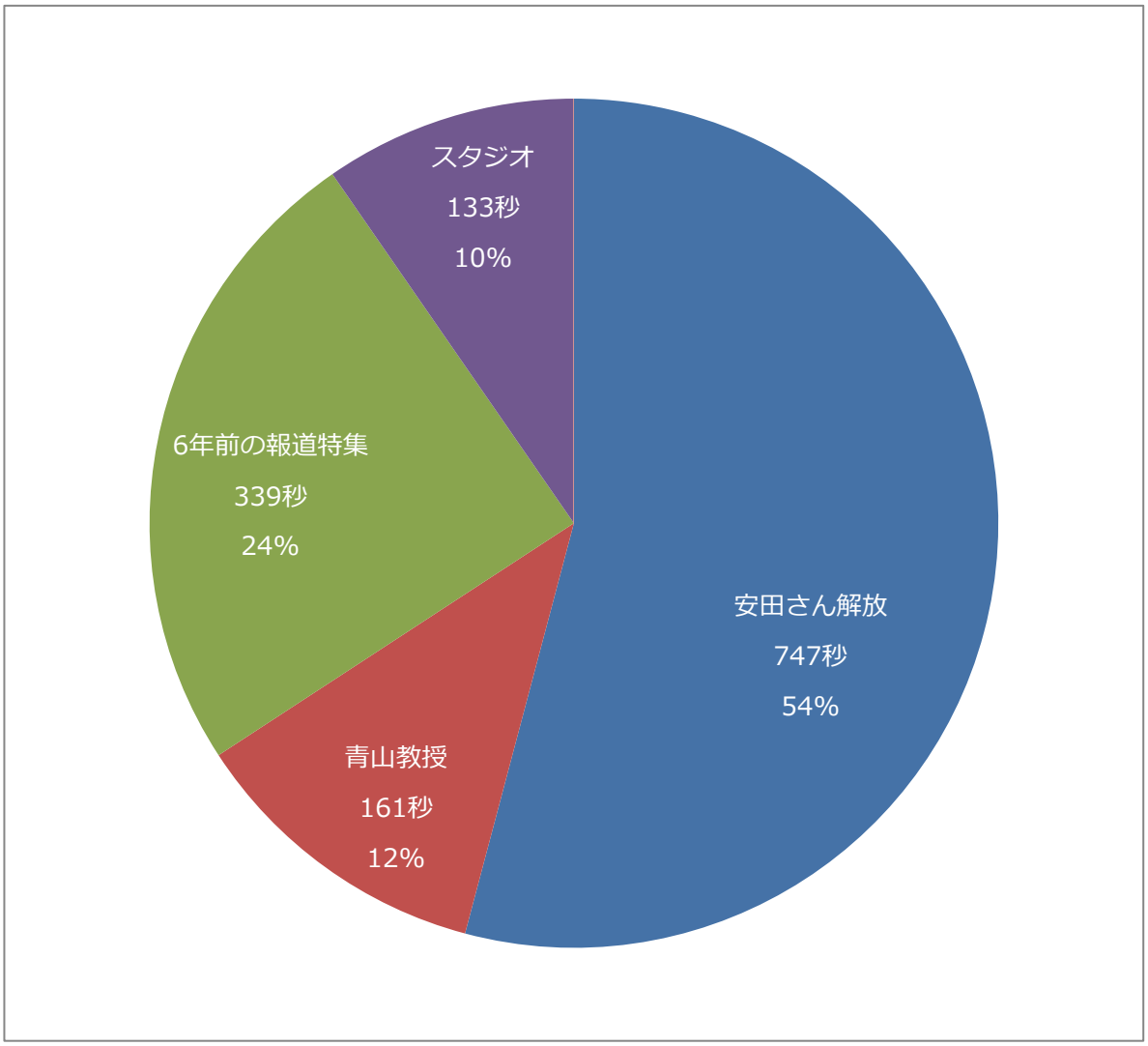
・天皇皇后両陛下が高知県の林業大学校を視察：結論→特に問題なし

高知県を訪問中の天皇皇后両陛下は香美市にある県立林業大学校を視察されたこと、高知県は日本一の森林率を誇る県でこの学校は新国立競技場を設計した建築家の隈研吾さんが校長を務めていることが伝えられた。このトピックに当てられた時間は秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】安田純平さん解放を検証：結論→特に問題なし

安田さんが解放されたことについての特集が組まれていた。この特集に当てられた時間は 1380 秒で、特集は

主に今回の安田さん解放、今回解放されたことについてシリア情勢に詳しい東京外国語大学の青山教授の見解の紹介、6 年前に安田さんの取材をもとに報道特集が混迷するシリア内戦について放送した様子、VTR を承けてのスタジオでのやり取りという四場面に大別されるもので、それぞれの時間配分及び比率は以下の通りであった。



安田さんの解放については安田さんの解放を受けて妻の深結さんが臨んだ会見の様子が伝えられた他、安田さんのメモおよび証言をもとに拘束されていた様子についてが取り上げられていた。安田さんのメモと証言をもとにした VTR は以下に朱記したものだった。

ナレ「シリアにて消息を絶っていたジャーナリストの安田純平さん。事態は今週大きく動いた。」

安田さん（翻訳・字幕）「私はシリアで 40 カ月拘束されていました。今はトルコにいて安全です。ありがとうございました。」

ナレ「武装勢力による拘束から解放され、トルコ南部の入館施設で、保護されたのだ。」

記者「今安田さんが出ていきます。安田さんが空港に入っていきます。」

ナレ「24 日夜、帰国の途につき、機内で初めて心境を語った。」

安田さん「自由になれたということが本当にうれしいです。3 年間全く、自分自身前に進んでいないので、世の中がどうなっているのか全く分からない状態だと、これからどうなるのか、どうして行こうかっていうところが、全く見えない状況で。その点のなんというか心配はあるんですけど」

ナレ「3 年 4 カ月の拘束、過酷な状況に置かれていた。」

安田さん「地獄ですよね、身体的なものもありますけど、精神的なもの、今日も返されないと考えるだけで、日々だんだんと自分をコントロールできなくなって、で、この監禁されている独房の中にいる状態が、当たり前の生活のように、感じ始めている。そのことを感じること自体も、まあ非常につらいというか、」
ナレ「はっきりとした口調ではなす安田さん。ひげは伸びているが、髪は短い。手には食べかけのパンも。拘束中は壮絶な日々を送っていたという。ノート全面にぎっしりと赤いペンで書かれた文字。安田さんが拘束中につづっていた日記だ。」
日記「10 月 22 日、悔やんでもしかたないやれることをやる。あきらめるわけいかん。」
日記「10 月 23 日、11 時 30 分、目覚めら瞬間永遠コースが浮かび、しずむ。後 1 カ月とか分かれば、なんでも耐えるが。」
ナレ「何時に起きたのか、自分の周りで何が起こっているのかなどを詳細に記していた安田さん。監視、拷問といった言葉も並ぶ。出された食事とみられる記述もあった。」
日記「12 時 30 分、トマトペースト、辛子ペースト、たまねぎ、ヨーグルト少量、ごはん、しょぼい。」
ナレ「20 日間の絶食を強いられることもあったという。さらに、」
安田さん「殴る蹴るの暴行を受けることはありました。彼らが毎回トイレまで連行するんですけど、その行き帰りでぼこぼこ蹴ってきたりとか。」
ナレ「日記には安田さんとは別に拘束されたとみられる人の様子も、記されていた。」
"日記「左はなぜここに入れられた？人質なら、オレより先出るかもしれんのに。左は礼拝してる気配もない。食ってる音も。」
「パンとたたく音、『ああー』とうめく声。こんなの聞いてて、なぜ俺は余計なこと話したか。」"
ナレ「他の人質が拷問を受ける生々しい様子も書かれていた。」
安田さん「24 時間身動き一つしてはいけないていうわけ。で、あと、水はもう一切いけないっていうのを 8 か月。奴らがずっと聞き耳を立てていて、指を曲げたこの音が、ちょっとしただけでダメ。で見せしめの拷問が部屋の前で始まって、すさまじい拷問を聞かされて、24 時間身動きしないとか無理じゃないですか。寝てる間に動いてもダメなんで、寝れない。」
ナレ「精神的に追い詰められてお行く様子も、うかがえる。」
日記「後悔ばかり、いまさらなぜ来たとかまで悔やむ。目覚めるたびになんとか外知らせないと死ぬと思う。」
安田さん「いつまで続くのかという恐怖感はずっとあって、あの一人質状態で恐ろしいのは、いつ終わるかわからない。終わらないかもしれないし、殺されるかもしれない。」
ナレ「拘束されている間、インターネット上には、安田さんの動画や画像が何度も公開された。」
安田さん「私の名前はウマルです。韓国人です。」
ナレ「今年 7 月には、自らのことを韓国人と事実ではない発言をしている。安田さんはなぜそういったのか。」
ナレ「あれは周りに囚人がいるので、日本人であることとか、私の実名を言うと、他の囚人が聞いて、例えば日本側に通報するとか、他の組織に通報するとかしたら、彼らばれちゃうじゃないですか。だから実名をいうとか、日本人と言うとかいうことは禁止されていたんですね。」
ナレ「日記には、日本人殺すのか、なんで日本人と知ってるなどと書かれていた。動画の撮影は数カ月に一度行われたが、公開されることは知らなかったという。」
安田さん「泣いてるバージョンと泣かないバージョンを撮るから両方やれって言われて、泣けってったって、泣けないから唐辛子よこせって言って唐辛子を持ってこさせて、自分で塗って、鼻水じゅるじゅるしてる時に、助けてくださいと言えっていったから言ったという。」

安田さん「あのビデオというのはあのーそういうルールを守ってこのビデオを最後まで撮れれば、今日解放するかもよ、みたいなそういうゲームみたいな感じなんですね。」
ナレ「安田さんが拘束されていたとみられるのは、シリア北西部にあるイドリブ県。反体制派、最後の拠点だ。民家や 5 階建ての大きな収容施設に、監禁されていたという。犯行グループはどのような組織だったのか。」
安田さん「本当に表現難しいんですけど、外国人を見つけたら、片っ端から捕まえて、あわよくば金をせしめてやろうという、やってることギャングのような感じですよね。」
"記者「何の集団とかは名乗っていたかはもうわからない」
安田さん「名乗らないです。」
記者「名乗らないんですか」"
安田さん「だから、メディアではヌスラとか言われてましたけど、彼ら自身はずっとヌスラであることを否定してたんですね。」

また青山教授の見解を紹介する場面では以下に朱記した部分が VTR では取り上げられていた。
教授「簡単に言ってしまうと、シリア情勢が変化して、安田さんが解放される環境ができたっていうことに尽きるんだと、思います。」
ナレ「こう話すのは、シリア情勢に詳しい、東京外国語大学の青山教授。アサド政権を支援するロシアと反体制派を支援してきたトルコが先月、内線終息に向け、合意に至ったことが大きいという。」
青山教授「この二つの国が、もうシリア内戦というのは事実上決したので、戦闘を収束させようという。具体的には、反体制派の支配地域に、非武装地帯っていうものを設置して、そこから 10 月の半ばまでに、反体制派は重火器を撤去してくださいと。プラスそこにいるアルカイダをはじめとするテロリスト、過激派は退去してくださいっていう。この二つの国がそれに合意し、トルコがその責任を負う形になったんですよね。」
ナレ「反体制派に強い影響力を持つトルコが圧力をかけたことが、安田さんの解放につながったというのだ。さらに反体制派を支援してきたもう一つの国がカタールだ。今回日本政府へ、解放の一報を齎した。」
青山教授「トルコやカタールが何かいったら、その指示に従う、ないしは耳を傾けなくてはいけないっていう状況にあって、今回、トルコとカタールが安田さんに関しては大きな役割を果たしてますけれども、戦闘をやめましょうとっていうふうにいったら、やめざるを得ないそういう状況にあったということですよね。」
日下部「つまり、そういう状況の中で、そういった反体制グループもですね、あのー安田さんをずっと拘束している意味がなくなって来た？」
青山教授「そうですね。戦わなくていいっていうふうになると、えー人質をかこっていて、その身代金をとったり、メディアに露出するって必要はなくなってしまうので、今回に関していうと、殺す選択肢と、返す選択肢を踏まえた場合、えー反体制派は自分たちが今後も引き続き活動していくうえで、トルコやカタールのいうことを聞くということを示しておく必要がありますよね。そうすると、殺してしまうよりは、トルコやカタールの花を持たせつような形で、解放するっていう、そういうたぶん戦略的な配慮があったかなというように思いますけどね。」

6 年前の報道特集については以下に朱記した部分が取り上げられていた。
ナレ「報道特集は、6 年前混迷するシリア内戦について放送した。取材したのは安田純平さんだ。」
安田さん「こちらの建物で、見張りながら、日々反撃をして、こちらの場所で攻防が続いています。」
ナレ「危険を冒してまで、安田さんは何を伝えようとしていたのか。」

民兵（翻訳・字幕）「気をつけろ！」
ナレ「アサド政権と反政府武装組織自由シリア軍が衝突する最前線。5 週間にわたる取材だった。」
ナレ「カメラわずか 200m 先で砲弾が飛び交い、ヘリコプターからの空爆も。安田さんが同行した自由シリア軍は政府軍の圧倒的軍事力を前に限られた武器で抵抗していた。」
ナレ「滞在中は反政府勢力の家庭や、軍の兵士らと寝食を共にした。状況がひどい町であるほど、歓迎されたという。」
ナレ「片言のアラビア語で言葉を交わす。兵士たちは素顔を見せた。」
"安田さん（翻訳・字幕）「前の仕事何？」
民兵（翻訳・字幕）「私たち？全員仕事はあるよ」"
"民兵（翻訳・字幕）「こいつはレストランでパイの生地を作っていたんだ。」
安田さん（翻訳・字幕）「レストランで？」"
民兵（翻訳・字幕）「そう、こいつは羊飼いだ。」
ナレ「政府軍から寝返ったという男性は、その理由をこう話す。」
"安田さん（翻訳・字幕）「なぜ離反したの？」
男性（翻訳・字幕）「アサド政権が腐敗しているからだ。もうじき倒れるだろうね。老若男女問わず殺害しているんだ。」"
安田さん「毎日のようにシリア政府軍による砲撃が行われています。近所の住人が地下にある民家に避難してきています。」
ナレ「一般の市民も連日激しい攻撃にさらされる。この民家も爆撃を受け、住民が死亡した。前日安田さんが撮影に訪れた民家だった。」
男性（翻訳・字幕）「見てくれ、これがアサド政権がやっていることだ。」
ナレ「建物の地下にある臨時の病院に女性や赤ん坊が運び込まれる。取材したこの街で命を落とした人は、当時、すでに 400 人に上っていた。」
ナレ「ジャーナリストの後藤健二が殺害された直後に開かれたシンポジウム。なぜ戦場取材を続けるのか、安田さんはこう語っていた。」
安田さん「えーあの地域がこういうことになっているとずっと見放してきたってことが今の現状の一番の原因です。間違いなく。見捨てられた人たちが、もう他に手がないんじゃないかとか、やけくそになったりとかいうことで起きている状況です。」
ナレ「この 4 か月後、安田さんはシリアで消息を絶つ。その直前の姿をとらえた映像がある。」
ナレ「これは 2015 年 6 月、シリア国境にほど近い、トルコ・アンタキア周辺の難民向けの小学校で開かれたイベントだ。」
ナレ「学校の関係者が撮影したこの映像には、拘束される直前の安田さんが映りこんでいた。安田さんのカメラはシリアから逃れてきた子供たちに向けられていた。」
ナレ「ボランティアの先生たちが、子供たちの為に趣向をこらす。一方で祖国への思いを歌う子供たちの姿もあった。」
"難民の少女（翻訳・字幕）「私たちの国を自由にしたい。」
難民の少女（翻訳・字幕）「世界のみんな手を伸ばして。どうして私たちを助けてくれないの？」"
ナレ「安田さんはこの子供たちの声を私たちに届けようとしていた。」

スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられた。

膳場「えーついさっき入った情報なんですけども、安田さんの関係者によりますと、今は検査もあって入院されてますけども、ドクターストップがかかるほど体調が悪いわけではないということで、遠からず記者会見をするつもりだということです。えーところで、シリアに取材に行く前にシンポジウムで話していたことなんですけども、あの地域の人たちを見放してきたことが、シリアの現状を招いてしまったという言葉ですけども、はっとさせられました。確かに、安田さんが取材してきた現地の人々、子供の症状を見ていると、ほんとに無関心でいられなく、なるんですよね、そういう力を持っているんですよね。」

日下部「あの私も解放の報にね接して、ほんとにほっとしたんですけども、ネットの反応を見ているとですね、日本社会がどんどんこう殺伐としていくなということを感じてます。あの膳場さんがおっしゃるようにんね、VTR を見ていると、安田さんがなぜ体を張ってシリアに入って、何を伝えようとしたかっていうのがよく分かると思うんですけどね、そして安田さんは誰よりもですね、自己責任を感じながら取材を続けていたんだと思います。ほんとに不確実な情報をもとにですね、あまり自己責任を振りかざしても、ほんとに建設的ではないなということを感じました。」

金平「あの、2015 年にね、後藤健二さんが殺害されたあとにシンポジウムでご一緒したんですけどね、安田さんと。その時はあの、自業自得だとかね、迷惑だとかっていう、そういうひどいバッシングが吹き荒れているときに安田さんすごく怒ってたんですよ。それを今自分がバッシングを受けるなってしまったということで、さっきから出てるようにじゃあ、VTR にあったようなああいうその戦争の現実というのを僕ら知らなくていいのかと、外国からお金出して、あの素材を買って見せればいいのかっていうね、そうじゃないだろっていうふうに思うんですね。でフリーランスの渡井さんという方が言ってたんですが、以前は政治家とか官僚が主導して、えーとその自己責任論をですね、火をつけてたんですけど、今は実はネットでね、一般の市民、一部の一般の市民がこうやっているっていう意味で言うと、戦地報道っていうのは、状況はますます悪くなっているというようにおもいますね。」

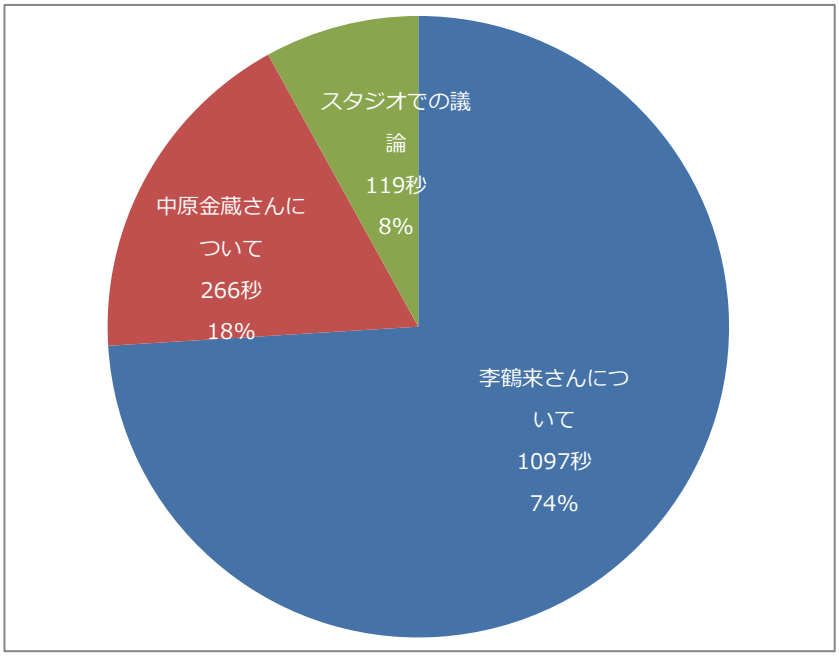
スタジオでの議論では「まず戦争の現実について僕らは知らなくていいのか」という問題と「外国から輸入するのではだめなのか」という点について、金平キャスターは頭ごなしに「知らないではいけない」、「外国からの輸入ではいけない」と発言していたが、海外の戦争の現実については知らないよりは知っているに越したことはないという点では異論はないだろうしノーリスクノーコストで知ることができるなら問題はないだろう。しかし、それを知るためにどれだけのコストやリスクなら受け入れられるのか、という点については人によって見解は分かれるところであろう。また「外国からお金出して、あの素材を買って見せればいいのか」という問題についても人によっては金平氏のようにメイド・イン・ジャパンあるいはメイド・バイ・ジャパニーズであることにこだわる人もいれば、輸入品でも構わないという人もいるだろう。また、自衛隊の海外派遣で賛否が分かれるような日本よりも、在外邦人救出のオペレーションのためのオプションをより多く持っている国があることを考えると有事の際を考えると日本国籍よりも別の国の国籍を持っていたほうが良いという考え方もあるだろう。日本での自己責任論の背景には、在外邦人救出のオペレーションのためのオプションという観点では日本国政府は諸外国の政府と比べても劣っているのでは、という日本国民の認識もあるのではないだろうか。

このように、相応に見解の分かれる点であり掘り下げた議論が必要なポイントであったが、スタジオで自身の見解を一方的に押し付ける金平キャスターの姿勢については放送法第四条一項四号の「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」に照らして問題があるものだと言えるだろう。

・【特集】不条理に立ち向かう元 BC 級戦犯：結論→特に問題なし

太平洋戦争後旧日本軍の BC 級戦犯として一度は死刑判決を受けた朝鮮半島出身の男性として、韓国籍の李鶴来さん（９３歳）が日本政府に謝罪と名誉回復を求め、議員立法の成立を目指して活動を続けている様子が特集されていた。

この特集に当てられた時間は 1482 秒で、李鶴来さんにスポットを当てた場面、泰緬鉄道の建設に携わった旧日本軍元鉄道隊員の中原金蔵さん（９８歳）へのインタビューのシーン、スタジオでの議論に大別され、それぞれの時間配分及び比率は以下の通りであった。



李鶴来さんにスポットを当てた場面については VTR が中原金蔵さんのインタビューを挟んで２つに分かれていた。それぞれ、以下に朱記したものが取り上げられていた。

【場面１】

ナレ「韓国籍の李鶴来さん。９３歳。太平洋戦争後、戦犯として死刑判決を受けた。日本政府に謝罪と名誉回復を求めている李さん。議員立法の成立を目指して活動を続けている。」

李さん「なかなかそれが国会でですね、問題になってくれないということで、お願いをしているわけです。」

ナレ「今年７月、体調がすぐれない中、衆議院の赤松宏隆副具長に陳情に行き、立法による解決や協力を要請した。」

赤松氏「頑張ってくださいね。しっかり命のある間にね、ぜひ本当に実現したい思いますので、ぜひまた頑張りますので、」

ナレ「多くの国会議員に働きかけている李さん。しかし今だ法案成立のめどはたっていない。７月まで開かれた通常国会でも、提出は見送られた。」

李さん「私たちはあの鳩山内閣以来、六十数年も歴代内閣に要請し続けているんですが、まだ問題が解決しないまま、不条理がつづいているんですけど、どんなに厳しい状況であろうとですね、私たちはこの問題をあきらめることができません。」

ナレ「朝鮮半島の小さな村に生まれ育った青年が、なぜ戦犯になったのか。そして戦後７３年の今も国を相手に戦う理由とは何か。」

ナレ「太平洋戦争中に日本軍によって建設されたタイとビルマをつなぐ泰緬鉄道。李さんはこの鉄道建設現場で

日本軍の軍属として働いた。」
ナレ「太平洋戦争開戦直後、日本軍はシンガポールなどの南方戦線で勝利し、２５万から３０万人もの連合国軍捕虜を抱えていた。」
李さん「捕虜が思った以上にいっぱい撮れたんだけど、それの管理を誰にするどこにするかと言ったら、結局韓国・台湾の青年たちをもってくるって」
ナレ「捕虜の監視員として募集されたのが、当時日本の植民地だった朝鮮や台湾の青年たちだった。」
ナレ「朝鮮半島にいた李さんは地元の責任者から呼び出され、１７歳で応募した。地域ごとに人集めのノルマがあり、断れるものではなかったという。」
ナレ「釜山の訓練施設では、こんなことも」
李さん「お前たちを立派な日本人にしてやるといってビンタで殴られたりね。よく毎日殴られましたよ。ビンタで」
ナレ「生きて虜囚の辱めを受けずと教える戦陣訓など、軍人精神を叩き込まれた。」
李さん「絶対捕虜になめられたらダメだとよということは上官から厳しく言われてますからね。そういうような教育を我々は一期でも２期でも受けたものだから、ビンタ一つたたくのは教育の問題であって、別に虐待しているんじゃないんだっていう。捕虜に対してもそういうことになっている感じ」
ナレ「各地の収容所へ派遣された朝鮮人の捕虜監視員は３０１６人。李さんの持ち場はタイのジャングルの奥地、泰緬鉄道の収容所だった。捕虜の虐待が禁じられている国際法は教わらないままだった。」
ナレ「泰緬鉄道の建設が始まったのはビルマ戦線が激しさを増していた１９４２年。インド洋の制海権を失った日本軍はビルマへの補給物資を陸路で運ぶため、タイとビルマ全長４１５キロを結ぶ鉄道建設に踏み切った。」
ナレ「建設に投入されたのは、オーストラリアやアメリカ、イギリスなど連合国の捕虜、およそ５万５０００人。さらにタイなどアジア諸国から７万人とも１０万人ともいわれる労働者も集められた。」
ナレ「李さんは建設に駆り出される捕虜の監視と管理を任されていた。」
李さん「鉄道の建設っていえば鉄道隊がやっているわけですよ。『捕虜を明日何名出してくれ』って言われたら、できるだけは、その数に間に合うようにやるのが、捕虜収容所の管理業務の任務だったですからね。」
ナレ「建設が進むにつれ、食料や医薬品が不足し、コレラやマラリアが蔓延。病に苦しむ捕虜も多かったが、軍の命令は絶対で、病人も作業に駆り出された。」
【場面２】
ナレ「BC 級戦犯として起訴された 5700 人のうち、321 人は植民地の朝鮮・台湾出身で、ほとんどが捕虜収容所の関係者だった。」
ナレ「日本軍の軍属として、捕虜監視員を務めた李鶴来さんは、劣悪な環境で病気の捕虜に労働させ、100 人以上を死亡させたという理由で、シンガポールで軍事裁判にかけられた。わずか2日で出された判決はDEATH　BY HANGING　絞首刑だった。」
日下部「デスバイハンギングを聞いた時、李さん」
李さん「どうなったかわからない。そんなことは。もう放心状態になっちゃって、まさかデスバイハンギングになるってことは思わなかったから、これはビンタ１つ２つね。殴ったことはありますよ。捕虜の。」
李さん「モノを取ったりね、天幕を破って寝台、寝床にした者を見て」
ナレ「日本軍の命令に従い、捕虜と接していた一監視員が戦争責任を負わされた。」
ナレ「李さんは８カ月の間、シンガポールのチャンギ刑務所に死刑囚として収容された。仲間が死刑を執行されたときのことは、記憶に刻まれている。」

李さん「一番列車出発、それから天皇陛下万歳、絶叫しながら、それにタッタタッタと上がった音がするんですね。韓国人は韓国人で大韓独立万歳を叫んでタッタタッタと上がっていく。そうしているうちにカタンという音がする。それが死刑執行の瞬間ですよ。」

ナレ「李さんはここで、日本人、朝鮮人 20 人近くの戦犯を見送った。」

李さん「我々は強制動員だといったって、そこへ行って結果的には、日本の戦争に協力をして、戦犯になって殺されていくんだというそれは民族的な負い目、民族に対する負い目ですね。」

ナレ「日本に協力したという負い目、一方で祖国から捨てられたという複雑な思いも抱える。」

李さん「自分の国の人が殺される言ったって、誰一人どうして殺すんだっていうことを言ってくる人もいないわけ。それは民族的な　棄民になった思いね。棄民になったこの寂しさ。」

ナレ「その後、李さんは懲役 20 年に減刑され、1951 年に東京のスガモプリズンに移された。翌年サンフランシスコ講和条約によって、日本国籍を失った。しかし刑を受けたときは日本人だったという理由で、収容は続いた。」

ナレ「李さんが釈放されたのは、1956 年。終戦から 11 年が経っていた。金も仕事もなく、釈放後の生活は困窮を極めたが、どうしても祖国に帰ることはできなかった。」

李さん「韓国では戦犯といったらね、『対日協力者』『親日派』でね、非常に風当たりが強かったからね。」

日下部「死刑囚になったっていうことで、なんかいろいろあったんですか？韓国では？特になかったですか？」

李さん「いやすぐには無いんだけど、やっぱり村八分みたいになって、お父さん、お母さんや、兄弟たちはね、非常にあの、苦しい目にあった。」

ナレ「李さんら朝鮮半島出身の元戦犯は、1955 年、日本政府に対し、謝罪と運動を求める運動を起こした。同じ戦犯でも、日本人には、軍人恩給などの措置があったのに対し、植民地出身者は、日本国籍ではないことを理由に、日本人並みの保証は受けられなかった。」

ナレ「李さんは刑務所の中でつづった手記にこう記している。」

李さん手記「都合のいいときは日本人。都合の悪いときは朝鮮人である。」

李さん「使い捨てだね、早く言うとね。使い捨て。日本人は自分の国の為に尽くして、戦犯までになっているのに、それに対して、謝罪もしなければ、補償もしようとしないという。使い捨てにしたということについての不満ですね。日本政府に対する。」

ナレ「その後も謝罪と補償を求め、李さんらは 1991 年に国を提訴。最高裁まで争われたが、請求は棄却された。そのうえで最高裁は立法府の判断にゆだねられる。とした。」

ナレ「戦犯仲間とタクシー会社を立ち上げ、日本で生計を立ててきた李さん。もと BC 級戦犯の朝鮮半島への遺骨返還にも力を注いできた。」

ナレ「去年 8 月、東京、東村山市の寺で、祖国への返還が決まった遺骨の追悼法要が営まれた。参列した李さんは。この寺が預かっているイ・ヨンギルさんの遺骨と向き合っていた。」

ナレ「スマトラ島で捕虜の監視員をしていたヨンギルさん。戦犯に問われたショックから服役していたジャカルタの刑務所で統合失調症を発症した。李さんとはスガモプリズンで一緒だった。仮釈放されたものの、その後 40 年間、療養所の精神病棟で過ごした。」

李さん「花火を見たら、あれは艦砲射撃だといっておびえていたから」

日下部「ヨンギルさんは戦争が終わったことは、わかってたんですか？」

李さん「だから彼の頭の中では、戦争は終わっていないんじゃないかと思う。戦争が終わったのも知らなけりゃ、自分が今日本に来ているのも知らなければ、それから家族の留守家族の生存すら、無関心だったということですね。」

ナレ「李さんは戦争責任を負わされ、日本の療養所で一生を終えたヨンギルさんの葬儀にも立ち会った。日本に暮らす朝鮮半島出身の元ＢＣ級戦犯は現在、李さんを含め、3 人。いずれも 90 代で、活動できるのは李さんだけだ。」
ナレ「朝鮮半島出身の元 BC 級戦犯の名誉回復を求めて活動する李鶴来さん。」
"藤田幸久参院議員「もうちょっとですから、頑張りましょう。今、詰めの段階ですから、」
李さん「何としても、お願いします。」
藤田議員「なんとか、最後、詰めを」"
ナレ「おととし、超党派の国会議員連盟が、弔慰金の支払いなどを求める法案をまとめた。国会提出に向けた動きが本格化し、李さんは国会議員事務所に足を運び、法案の早期成立を訴えた。しかし、」
"「衆議院を解散する」
ナレ。去年 9 月に衆議院が解散。法案提出は見送られた。」"
李さん「がっかりも怒りももう同時に来ますね。私は戦中戦後、戦後処理はあらゆる犠牲を強要しているんですよ。そうしながら、わたしたちの問題をこういうふうに放置しているのは、あまりにも不条理じゃないかとそう思います。」
ナレ「長年この問題に尽力してきた国会議員の引退も痛手となった。」
ナレ「今年 4 月、国会内で集会が開かれた。」
自民党　北村誠吾衆院議員「誰かがやらなければ、日本人として、外国に向けて非常に恥ずかしいことだというふうに私は思います。」
立憲民主党有田芳生参院議員「とにかく立法を実現させるしかありません。与党とともに私たちも全力を尽くしながら頑張っていくしかありません。」
ナレ「しかし、またしても通常国会での法案提出には至らなかった。」
李さん「今までも議員連盟の議員たちはですね、今回は間に合わないけど、次の国会で解決します。ということを強調していた。BC 級戦犯に限っては問題が処理されない。いったいどういった事なんだということをこちらが聞きたいですよ。」
ナレ「93 歳を迎えた李さん。体調がすぐれず、入退院を繰り返すことも増えた。自分が生きている間に問題を解決したい。その思いで活動を続けている。」
日下部「命を削ってね、こう活動を続けているって皆さん言いますけど、」
李さん「そうですね、今、生きているのは 3 名ぐらいしかいないからね、だから私たちは、補償とかいうよりも、日本政府の謝罪をまずやってもらいたいんですよ。今度の臨時国会で、何とかしてもらわないと、私そのあとも続くかどうかわからないよ。」

　中原金蔵さんへのインタビューは以下に朱記したものが取り上げられていた。
ナレ「泰緬鉄道の建設に携わった旧日本軍の鉄道隊員にも話を聞くことができた。熊本市に住む中原金蔵さん９８歳だ。鉄道第９連隊の測量部隊として、タイ側からの敷設に参加した。」
ナレ「中原さんら測量部隊が、ゾウを使ってジャングルを切り開き、工事の先頭に立ったという。」
中原さん「もう茂みがあると、鼻で巻き上げてですね、グーっと象がいっぺん通ると竹やぶの密林も穴が開く。」
"日下部「これみんな捕虜ですね？レール？」
中原さん「はい。１０人、１０人ぐらいで全部担いでですね、敷設するわけ、これですが、１本が２０キロばかりある。」"

ナレ「全て手作業で進めるため、人手は常に必要だった。さらに岩盤や河川が多い地形で工事は難航した。高さ１０ｍほどの断崖を鉄道が通れるだけの幅に垂直に削り取った岩場はヘルファイア・パス、地獄の切通しと呼ばれた。」
ナレ「岩盤をダイナマイトで破壊し、ノミとハンマーを使って人力で掘り進めた難所には現在も枕木と線路が数メートル残されている。」
中原さん「もう人海戦術ですもんね。ちょうど１０メートルに１３本枕木が入りますもんね。それでですね、枕木１本に１人ずつ死んどっとですよ。」
"ナレ「4 万人を超えるといわれた死者を出し、泰緬鉄道は 1 年 3 カ月という速さで完成した。
しかし翌年、日本軍はビルマでのインパール作戦に失敗。戦況は悪化の一途をたどった」"
ナレ「鉄道完成後、機関士として補給業務に従事していた中原さんには、忘れられない光景がある。」
中原さん「英軍が占領しとるもんだからですね、今度は山ん中ばですね、ずーーーーっと 30 日ばかりかけてですね、退却してくるわけ。」
中原さん「日本人の兵隊さんがですね、骨だけであばらが見えとっとです。肉がつい取らんです。」
中原さん「まあこの姿を内地のお母さんが見たら気絶せんかと思うたですよ。」
ナレ「ビルマへの物資輸送路だったはずの泰緬鉄道は、ビルマからの敗残兵の退却路となった。そして迎えた終戦。」
ナレ「勝者となった連合国捕虜と、日本軍の立場は逆転した。」
中原さん「私たちはですね、全部ならべてですね、鉄道隊の兵隊は全部並べて、向こうが首実検するわけ、そしてですね捕虜ばいじめとっとは引っ張っていくわけ」
中原さん「機関車が出来上がるまでは測量の方に廻っとったけん、あんまり捕虜とは接しとらんわけ、それでよかったんです。ああやっぱりこれも運命ですよね。」
ナレ「捕虜との接触が少なかった中原さんは、罪に問われなかった。戦後 bc 級戦犯の裁判が各地で行われた。捕虜に関わったものは軍事裁判で厳しい追及を受けた。」

VTR を承けてスタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられていた。
膳場「李さんが書き残していらっしゃるあの、都合のいいときは日本人、都合の悪いときは朝鮮人、という通りの理不尽な扱いですよね。どうしてこんなことが放置されているのか、あの超党派の議員連盟もあるのに、なんで前進しないのか、憤りも覚えますよね。」
日下部「あの戦犯に問われた旧植民地の若者たちはですね、さまざまな差別、そして葛藤を抱えながらもですね、日本人として、日本軍の為に働いた。そのうえで日本軍の戦争責任まで負わされてるわけですね。青春時代だけでなく、人生そのものも台無しにされてしまった。このことは歴史的にも争いのない、事実なんですね、そしてこの事実を前にですね、補償どころか何の意思表示もしない国家とはいったい何なんだろうと、取材を続けながらですね、ずっと自問を続けてきました。」
金平「これほどあらかさまなね、不条理が放置され続けてきたことに、日本人の一人として私も、恥ずかしささえ覚えるんですけども、日下部さんね、これ国会レベルとかそういうところで、何とか進める方策というのはないんですか？」
日下部「あのー、国会議員の人たちに聞くとですね、与党から野党までですね、多くの人はこの問題は李さんが生きている間に解決しなければならないんだと、口をそろえるんですね。でも、実際にはですね、今は日韓関係がよくないからといった理由でですね、どんどんどんどん先送りにされてきたと。とにかく時間がもうありませ

ん。あの、93 歳の李さんはですね、去年ぐらいから体調を崩して入退院をこう、繰り返しているんですね。あの一この問題というのは、李さんがいないと本当の意味で日本がですね、けじめをつけたことにはならないんですね。あの一議員の皆さんにはぜひ、このことを胸にですね、臨時国会に臨んでいただきたいと思いますね。」
膳場「以上特集でした。」

放送法第四条の観点からは特に問題は見られなかったが、特集の姿勢として韓国人 B・C 旧戦犯に非常に寄り添ったものだった。では、似たようなテーマで対象が戦前の本土日本人であった場合はどのように扱われるのか、という点について今回の姿勢は一つの目安にはなると考える。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特になし

検証者所感

・朝鮮通信使の木造船再現

中尾宏委員長の「いちばん大切なことは、小異を捨てて大同につくという言葉がある、小さなことはさておいて大きなことについて意見の一致を見よう、そういうことをしなければ本当の講和なんて出来っこないです。」というコメントについて、日本と朝鮮の間で一致が見られる「大同」の候補について特に言及がなかったが、中尾委員長は具体的にはどういったことであれば日朝間で「大同」を見られるだろうと考えているのか、気になった。

・【特集】安田純平さん解放を検証

スタジオで繰り広げられた議論では日下部キャスターの「ネットの反応を見ていると」であるとか、金平キャスターの「フリーランスの渡井さんという方が言ってたんですが、以前は政治家とか官僚が主導して、えーとその自己責任論をですね、火をつけてたんですけど、今は実はネットでね、一般の市民、一部の一般の市民がこうやっている」というコメントで「ネット世論」について言及されていた。スタジオの膳場キャスターや日下部キャスター、金平キャスターはいずれもジャーナリズム産業あるいはテレビメディア産業に従事することを生業としている人間であるから、その職業生活において自然とジャーナリズムの価値を高く見積もる人と接する機会が多いだろうからこそ、ジャーナリズムに対しても自己責任論の対象とみなすネットの一部市民の声には衝撃だったのではないだろうか。

金平キャスターのスタジオでのコメントについては聞いていて二点ほど興味深い点があった。

一点目は「フリーランスの渡井さんという方が言ってたんですが、以前は政治家とか官僚が主導して、えーとその自己責任論をですね、火をつけてたんですけど、今は実はネットでね、一般の市民、一部の一般の市民がこうやっているっていう意味で言うと、戦地報道っていうのは、状況はますます悪くなっているというようにおもいますね。」という部分であるが、そもそも、なぜ以前の自己責任論は政治家や官僚が主導していたとされているのだろうか、その背景として考えられるのは、そもそも日本政府には国内はともかくとして海外の有事に対しては憲法上の制約から在外邦人を救出するためのオペレーションを遂行する能力であるとかオプションが不足していて、そうしたオペレーションを遂行する能力や政府を授権規範である憲法によって国民から与えられていないから、危険地域についてのアナウンスまではするが、海外有事に巻き込まれた在外邦人の救出については日本国政府に過度な期待はしないでくれ、ということの裏返しなのではないだろうか。そしてまた、それが一部の

一般の市民（一般の市民をさらに一部と形容したものが一般の市民を指しているのかは怪しいが）、にとってもそもそも日本国政府に在外邦人救出など期待もしていなければそのためのオペレーションに必要な能力やオプションを政府に与えないことを憲法上定めていて、かつ海外で活動するジャーナリストが日本国籍を離脱し在外邦人救出のためのオペレーション能力やオプションを持った国に保護を求めるべく国籍を取得することは妨げられていない以上は日本国籍を保持した上で政府が危険地域とアナウンスしているような地域に渡航することは自己責任だ、と見なしている、そうした見方も成り立つのではないだろうか。いずれにせよ、自己責任論を批判するにしてもその自己責任論がどういったところに由来しているのかという点はもう少し掘り下げる必要があるのではないだろうか。

二点目は「VTR にあったようなああいうその戦争の現実というのを僕ら知らなくていいのかと、外国からお金出して、あの素材を買って見せればいいのかっていうね、そうじゃないだろっていうふうに思うんですね。」という部分である。この部分について、「戦争の現実を知らなくていいのか」という問題と「外国からお金を出して、あの素材を買って見せればいい」という問題は別の話であり、戦争の現実を知るということを考える上で、その素材が外国からの輸入品であるか、日本国民のジャーナリストによるものなのかがそれほど大きな問題なのだろうか。これと同じ構造の理屈を例えば農作物や自動車などに置き換えた場合、そうした主張はいわゆる「保護主義」と言われるものになるのではないだろうか。

・【特集】不条理に立ち向かう元 BC 級戦犯

スタジオでの日下部キャスターの「この事実を前にですね、補償どころか何の意思表示もしない国家とはいったい何なんだろうと、取材を続けながらですね、ずっと自問を続けてきました。」や金平キャスターの「これほどあらかさまなね、不条理が放置され続けてきたことに、日本人の一人として私も、恥ずかしささえ覚える」というコメントがあったが、こうした感覚は、日本社会や日本国政府に対して何をどこまで求めるのかという要求水準や期待値が元々は高かったからこその感覚であり、そもそも日本社会や日本国政府に対して期待を抱いていなければ自問することもなければ日本人の一人として恥ずかしさを覚えることもなかったのではないだろうか。そういう意味では、安田さん解放と自己責任論についても、日下部キャスターや金平キャスターには元々は日本社会や日本国政府に対して比較的高い要求水準や期待水準を抱いていたのではという印象を受けた。

また、この問題は VTR でもわずかばかりではあるが言及された「朝鮮半島にいた李さんは地元の責任者から呼び出され、１７歳で応募した。地域ごとに人集めのノルマがあり、断れるものではなかったという。」というナレーションや李さんの「自分の国の人が殺される言ったって、誰一人どうして殺すんだっていうことを言ってくる人もいないわけ。それは民族的な　棄民になった思いね。棄民になったこの寂しさ。」という点、つまり戦前・戦後の朝鮮半島の地域社会の問題も絡み合っている。こうした問題に対して確かに日本側の対応が十分とは言えない一方で朝鮮社会の対応も大概であるが、朝鮮社会の側の問題については踏み込まなければ片手落ちになってしまわないだろうか。係争中の案件として扱うのであればそれでいいが、歴史という俎上に載せるのであれば、現在被害者感情を抱いている人にとって受け入れがたいものであったとしても史実は史実として摘示していく姿勢が必要ではなかろうか。